研究

龍渓矢野文雄先生（八）

佐伯史談会
賛助会員　山内武麒

宮内官となる

龍渓先生にとって一報知新聞」経営の約束をした一年が経った。條約改正問題もとにかく一段落したし、大限の体もすでに回復した。引退の素志を貫くのにちようどよい時機である。しかし先生は考えた。「たとえいま開地についても、この前のように先輩や知友のためにいつまた引っぱり出されるかも知れない。むしろ、この際東方朔の故智にならって、世を金馬門に避くるにくはなしい」と。そこで先生は宮内省へ入ることが一番よいと考え、伊藤博文に話して力添えを頼んだ。先生がこうしたことで他人に依頼したのは、この時が初めてであったそうである。若いときから先方から迎えられて地位についたが、自ら求めたことは今まで一度もなかったのである。

伊藤の尽力により、先生は明治二十三年（一八九〇年）十一月二十五日、正式に宮内省出仕を仰せつけられ御用掛を任命された。この時、先生は四十才であった。

前年二十二年には すでに憲法発布があり、この年最初の帝国議会が開かれた。即ち、貴族院は六、七、九月の三か月のうちに、多額納税議員の互選、有爵議員の互選、ならびに勅選などがあり、衆議院議員は七月一日に総選挙を終って、先生が宮内省出仕の辞令を受けて間もなく、第一回帝国議会は日比谷の新築議事堂でその産声をあげたのである。

十一月二十九日、貴族院に於いて開院式き挙行し、明治天皇は親しく臨御遊ばされ勅語を賜わったが、そのとき先生は宮内官として陛下に扈従し御側に侍立して、この意義ある歴史的式場に参列したのである。顧みるに過去十有余年、その生命き捧げてただ一途に立憲政治樹立に邁進して来た龍渓先生である。国会開設の日には改進党の領袖として必ず議席に列するであろうと誰人からも期待されていた先生である。その先生が、全然政党政派を超え、政権から離れた宮内官として、この式場で議員諸公と相見えるとは余りも数奇な運命であった。

先生は、翌二十四年（一八九一年）には皇族令取調委員となり、更に爵位規定取調委員を兼ね、二十五年には帝室礼式取調委員を仰せつけられた。しかし、一定の官職がなければ宮内省としてもその取扱いに困るというので、その頃高級の勅任式部官二名を置くことになったのを幸いに、二十六年二月、先生は式部官に任命された。相役は水戸の徳川篤敬であった。二人は新年正殿に於ける朝賀の時のような大礼以外は、陛下の御前に立たなくてもすむので、先生は悠々と閑日月を楽しむことができた。ところがこのことを聞いた親友の井上毅は憤慨して、人を介して先生へ抗議した。「式部官などとは余りに人を馬鹿にしている。何故もっと重要な役目を引受けてくれないのか。」というのである。井上だけでなく先生を知る人は、先生の才能を惜しんだのである。

先生はこの宮内省に在官中は殆んど文筆から遠ざかっていた。ただ一冊「西洋若主言行録紀略」と題するもの

を書いた。これは西政諸国の君主の称讃に値する言行を集めて編さんしたもので、時の東宮殿下（後の大正天皇）に献上したものである。これは本としては刊行されなかった。

先生が宮内省に入って七八年の後、ほしなくも宮内省に対する非難の声が起った。それは各地にある山陵のお手入れが不行届きであるというのである。それが新聞でも論議されだし、輿論の火の手が高まった。そのために先生は諸陵頭に任ぜられ、山陵修理に当ることになった。時は明治二十九年（一八九六年）十一月であった。先生は先ず近畿各地の御陵を巡視して、修築すべきものは修築し、手入れすべきものは手入れさせたので、世間の非難はすぐに消えてしまった。これが終ると間もなく、英照皇太后が崩御遊ばされたので、御柩供御を仰せつかったり、或いは御陵墓のことに典ったり、諸陵頭としての使命をとどこおりなく行った。

外交官となる

龍渓先生が宮内官として宮中に奉仕している間に、世間、殊に政界ではさまざまな出来ごとがあった。松方内閣ができた。ロシヤの皇太子ニコラス二世が大津で刺された。濃尾の大地震が起った。伊藤内閣が成立した。とりわけ重大なことは、その間に日清戦争があった。議会は幾度となく解散され停会となった。思えば新興日本にとって眼まぐるしいほど多事多難の数年であった。しかし、政治の圏外にあった先生はいずれにも直接の交渉を持たなかった。

ところが、明治二十九年（一八九六年）九月に松方内閣が成立し、大隈重信は再び外務大臣の椅子についた。大隈は早速龍渓先生を呼び寄せて駐韓全権公使になるようすすめた。先生は無論これを辞退した。しかし大隈は再三先生を招き、閔妃暗殺事件後の朝鮮が、日本の外交上如何に重要な問題をかかえているかを説いて承諾を迫るのであった。

政界を去って既に八年、今更煩わしいことにたずさわる気持は微塵もなかった先生も、年来の知己である大隈の切なる懇請に断りかね、去就に迷ったあげく、伊藤博文に相談すると、伊藤は「それほどまでに大隈が懇望なら、一つ出てみてはどうか。しかも同じ公使になるなら支那がよい。朝鮮は君には舞台が小さ過ぎる。」とすすめた。これで先生は外交界へ乗り出す決心をして大隈の求めに応じた。大隈は伊藤の言葉通り、先生を「特命全権公使」に任じ「清国駐劄」を命じた。時は明治三十年（一八九七年）三月十一日で、先生は四十七才であった。

先生は以前大蔵官吏として内政方面には多少の経験はあったが、外交方面は全くはじめてであった。しかし、他国とちがい支那は幼い頃からなじみ深く、先生の興趣をそそるに十分であった。

龍渓先生は辞令を受けるとすぐ出発した。先ず南支那を見ようと船で上海へ行き、上海から蘇州、杭州を視察して、五月の初めに北京の公使館に入った。

明治三十年といえば、日清戦争が終って間もない頃である。清国は日本との戦いに一敗地に塗れて昔日の面影はなく、各列強国は仇牙を磨いで清国政府に圧力をかけていた。ロシヤは満洲鉄道の敷設権を得て、魔手を満蒙一帯に広げようとし、その上旅順、大連を租借した。ドイツは山東省でドイツ宣教師が暴徒により虐殺されたことを口実にして、軍艦を派して膠州湾を占領し、遂に九十九年間ここを租借する権利を得、フランスも負けじと

広州湾を租借した。日清戦争の講和会議のあと「東洋の平和を害す」と日本を脅威して遼東半島を還付させた露、独、仏は、かように掠奪をはじめたのである。しかもこれに対してイギリスもまた、劣らじとばかり威海衛の租借権を得ることに成功した。そもそも威海衛は、戦争の償金の担保として日本が占領していたが、イギリスが肩がわりして償金を日本が受取って、そのかわりに威海衛を租借してしまったのである。

かように列強が競って支那の領土を蚕食することは、わが国にとって一大脅威である。が幸いにもわが新領土になった台湾の対岸福建省には何処の国も手をつけていない。これを見て早急の間に、龍溪先生は清国政府に福建省不割譲を約束させた。いち早くこの約束をさせたことは、真に鮮やかな手腕であった。

当時の中国、即ち清国には光緒帝がいたが、西太后の勢力が盛んで政治を専断していた。李鴻章はこの西太后に重く用いられて、専ら外交の衝に当っていた。先生は赴任以来、しばしば李と会談して折衝を重ねていたので、二人の間がらは自然に親密になっていた。

西太后の権勢が強大であることは物議の種となるものであった。光緒帝が幼少の時には止むを得なかったが、今は既に成年に達しているのに、依然西太后が政権をゆずらないので、帝の側近かものたちは不平不満であった。その上光緒帝は軟禁されて幽閉同様であったという。帝は日本公使館に保護を求めてきたが、先生は内政干渉になることをおそれてこれを拒否した。

明治三十一年（一八九八年）八月、先生がたまたま賜暇帰朝中に、光緒帝の側近たちは西太后の勢力を抑えようと画策したが、何分にも兵力の背景が無かったために惨敗し、西太后は帝を宮廷内の小島に幽閉してしまい、側近たちの多くは捕えられて殺された。

この事件に動かされたのか、先生は「支那全土、四億の民を救う道は、教育の根本的改革を措いて外にない」と考え、先生はむしろ公使の職をなげうって、清朝の教育顧問となり、その教育改革に身命をささげたらどれだけ愉快であろうかと思った。そして伊藤に手紙を出して自分を清朝の教育顧問にならせる道はないかと諮ったという。これには流石の伊藤も返事のしようがなかったらしい。

これより先三十年の十月に大隈は外務大臣を辞し、反政府党が内閣不信任案を出したので、議会は解散を命ぜられて、松川内閣は総辞職した。代って伊藤内閣が誕生したが、僅か半年たらずで瓦解してしまった。そして三十一年六月に、わが国最初の政党内閣ともいうべき憲政党内閣が発足した。大隈が総理兼外務、板垣が内務、尾崎が文部といった顔ぶれであった。しかし憲政党内の旧改進党と旧自由党との間に反目が起こり、組閣後僅か五ヶ月でつぶれてしまった。このようにわが国内が頻々と政変があり、清国には前述のような変乱が起ったが、先生は不思議にもその渦中に巻きこまれずして、公使の任にあった。

憲政党内閣が瓦解して、そのあとに山縣内閣ができて、青木周造が外務大臣となった。青木は先生には一面識もない人であった。そのためか外務省は先生に帰朝を命じたのである。

先生が帰朝して間もなく、清国に大事件が突発したのである。拳匪と称する匪賊が山東で暴動を起こした。いわゆる北清事変が勃発したのである。拳匪はキリスト教排斥と外人の駆逐を叫んで民衆を扇動し、これを組織化して義和団と称し、その勢は見る見るうちに拡大して、

鉄道を破壊し、電信を切断し、やがては北京に乗りこみ、官兵もこれに加って、北京にある外国公使館を焼打ちして外人を皆殺しにしようとした。ドイツ及び日本の公使館は遂に暴徒に包囲されて危険な事態となった。この時、当時衆議院議員であった先生の令弟小栗貞雄氏も、事業視察のため天津に来ていたが、たまたまこの騒乱にまきこまれ、暴徒の囲みの中にあった。

北京の形勢が険悪になると、各国公使は自国の水兵を上陸させて防衛にあたらせたが、雲霞の如き義和団に対抗し得る大軍を、手近く出兵できるのは日本より外にない。龍溪先生はこの暴徒を鎮めるため三万の兵を派遣するよう山縣総理に進言した。山縣も軍人上り、すぐ先生の言葉通り三万ばかりの兵を繰り出した。このとき「報知新聞」からは従軍記者として、佐藤紅緑が派遣された。

この事件は幸いにも　七月十四日先ず天津の囲みがとけて令弟は助かり、八月十六日には北京も陥落して、公使館の全員が無事に救助されたので、先生もはじめて愁眉を開いた。

（この項終り）

研究

土佐堅田氏と佐伯氏

会員　佐藤　貫一

さきに、高知県須崎市の堅田勇氏から、佐伯市教委の加藤氏あてに「土佐堅田氏」に関する史料や、土佐堅田氏と佐伯氏に関する考察について、佐伯地方の伝承や佐伯氏関係史料との比較研究を設問されてきた。私は加藤氏からこれらの史料と考察を借覧し、私なりに検討した。

堅田氏から送られてきた史料のうち「土佐名家系譜」の抜粋「堅田氏系譜」はいわゆる一般史料で、私たちが容易に手にすることができる諸家系譜である。堅田氏系譜は堅田氏の起元を佐伯・堅田氏に求め、

高岡郡に佐伯・堅田・緒方の三氏あり。実は一系にして神別大神氏に属し、日本有名の巨族なり。豊後の国に発し、各派流れて土佐国に遷移す。而して其の根本は緒方氏なり。

とし、和名抄、三代実録、本朝世紀、平家物語などを引き、大神姓佐伯氏系図の略系図を載せている。佐伯地方にある大神姓佐伯氏系図の巨とんどは、祖母岳大明神の神子大神惟基を始祖とするが、堅田氏系図にていてある大神系図は、三代実録によって大神朝臣豊後介良臣を始祖とし、大野郡大領で大神惟基の父といわれる大神底綱と、本朝世紀の佐伯是基を同一人として記載している。そして註記して「按ずるに佐伯氏末流堅田氏となる。而してその分立は鎌倉弘安時代に在り」と説明し、次に弘安の豊後図田帳から佐伯弥四郎政直、佐伯八郎惟資、堅田左衛門三郎惟光の名を列記、さらに佐伯氏系図から方田（堅田・片田）左衛門惟定・惟保・惟景・惟長の堅田氏歴代を記載して、問題の人物、土佐堅田氏の祖堅田小三郎佐伯恒貞なる人物と、どのように結びつけようかと苦心している。しかし結局、佐伯氏支族の堅田氏と土佐堅田氏とを結びつけることは難しく、次の堅田小三郎佐伯恒貞の項には「恒貞祖先、来国の時代は未詳、其の津野新庄を領し、足利氏に属すを見れば、来時は蓋し鎌倉末時なるべし」と記入し、どこから来たとも記していない。

ところでこの堅田小三郎佐伯恒貞であるが、佐伯文書（佐伯経貞軍忠状など）には経貞とあり、日本地名大事典、高知県の歴史等には佐伯経貞となっている。堅田氏